
バクの吐瀉物。

ふろあたむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バクの吐瀉物。

【Nコード】
N2301W

【作者名】
ふろあたむ

【あらすじ】
悪夢を喰らったバクの吐瀉物。

或る正午の風景。

空が揺れていた。

単色の虹の麓からタツノオトシゴが降ってきた。

ジャクリーンは全ての銃口に鼻糞が詰まった回転式のマシンガンを掲げて、市役所に飛び込んだ。

年金の支払いを免除してもらったためだった。

役員は尻の穴からショットガンを取り出して、ジャクリーンの股間を吹き飛ばした。

「帰れ！ 警察を呼ぶぞ！」

役員は、破れたズボンを、先ほどまで食べていた魚の小骨と、先ほどまで食べていた蚕の中から蛹になっているものを選び糸を紡いで、ちくちくと縫いながらジャクリーンにもう一度叫んだ。

「早く帰れ！」

しかしジャクリーンは帰らなかった。

股間から下が無いために、歩けないのであった。

代わりにジャクリーンは、役員に裁縫セットを要求した。

「僕の胃腸でこの大理石の床を汚されなくなったら、魚の小骨と蚕の糸を出すんだな！」

しかし役員は、耳からスナイパーライフルを取り出して、ジャクリーンの顎にある毛穴に銃口を突っ込んで発砲した。

「どういう脅しだ！」

至極真つ当な突っ込みである。

だがジャクリーンは反射反応でマシンガンの引き金を引いた。

鼻糞が飛び散る。

死後硬直でマシンガンは暴発している。鼻糞を全て発射しきると、実弾の番である。

役員の右手の人差し指。その爪と肉の間に弾丸がめり込んだ。どうやら役員の心臓は、人差し指の第一関節にあったようで、そ

齒槽膿漏ブルース。

ペドフィリアの美しい女は、ピーラーを研いでいた。腋の毛を処理するためである。

女はきらりと光るピーラーの刃を見つめて、今日のバイトのことを思い出した。いや、バイトというよりは、バイト中の会話である。女は、今日も線路に飛び込んだ轢死体を片していた。

年齢的には女の方が上だが、バイトでは先輩にあたる女子高生が、こう言っただった。

「知ってる？」

はて、いったいそれは何のこっちゃ。女はそう思った。知ってるものにも、何を聞いているのかが皆目検討がつかないために、女は答えようがなかった。それでも神と同等に尊敬する先輩に迷惑をかけるないように、健気に健気に脳味噌を絞って考えたのだが、耳からこぼれる脳漿が枯れたあたりで、諦めた。

「知りません」

その答えを聞いた女子高生は、女に絶望した。その悲しみは相当なものようだった。その左目が朽ちてゆく様子を見ると、女子高生の思いがまざまざと感ぜられる。彼女はペドフィリアの女に恋をしていたのだ。

ミキサーにかけた昆虫ゼリーのようになった左目が鳩を生み、東の空に羽ばたき消えると、女子高生はやっと口を開いたのだった。

「噂のことよ」

その噂には聞き覚えがあった。情報化社会の生きた化石と呼ばれる女でさえも、その噂が記憶のうちにあったのだから、それはとてつもなく有名な類なのだろう。

吸血鬼の話である。吸血鬼とは、読んで字のごとく、血を吸う鬼のことである。

噂の吸血鬼は、どうやら齒槽膿漏で犬歯が抜けているらしく、血

は鼻から吸うという。殴って出血させて、鼻から吸う。

都市伝説としては、二足歩行の百足と同じくらいありがちな話だが、はて、女子高生はいつたい何故それを話題に出してきたのだろうか。女は理解するのが難しかった。

しかし女は、先ほど左目が朽ち果てるほど女子高生を失望させた。また失望させると、今度は何が起きるかわからない。少なくとも右足に新しい薬指が生えてくるのは確実だ。

女は右の鼻の穴に睫毛を突っ込み、左脳を直接刺激した。鯨が目の前を飛び交った。先ほど絞った脳味噌がほぐれたのだ。オレンジジュースが無いので、脳漿を補充するには至らないが、頭脳活動を明晰にするには十分だった。

雷撃のように思考が駆け巡り、そしてショートした。尻から煙が上がる。腐卵臭が立ち込めた。あまりの匂いに、女子高生は鼻を落とした。虹色の鮮血が迸る。

女はピーラーを研ぎ終わった。それと同時に回想を終える。

何のことはない。いつもと変わらない日常だった。しかし吸血鬼の存在を、万物流転の中にある永遠不動の大地の理たる女子高生から聞いたことは、ペドフィリアの女にとっては、大きな転機だった。退治するのだ。

その考えは、対大隊テロリスト用兼対侵略型他惑星生物用人造擬似人型生物最新兵器である彼女にとって、当然の帰結と言えた。

ピーラーで腋毛を処理し終えた彼女は、裁断鋏で鼻毛を整え、押し入れに仕舞っていたアタッシュケースを取る。

腋から出血しているのにも構わずに、女は鍋の蓋とひのきのぼうをリュックサックに詰める。

漆黒の甲冑に身を包み、アタッシュケースを左手に、OUTDOORのリュックサックを右肩に担ぎ、サンダルを履いた。

吸血鬼の住処は、公園の滑り台の下だ。

女は覚悟を決めた顔で、家を出た。

天気は悪かった。降っているのがまだ秒針だから良いものの、これが時計になれば雨宿りが必要になる。分針になってしまえば、もう世界のお終いだ。前に終わったときにも、復旧に二日かかったというのに、もう一度世界が無くなってしまうば、どうなることかと女は身震いした。隠れるための掘りごたつだって、絶滅してしまつたのだ。

吸血鬼は、やはり滑り台の下にいた。配給だろうか、発泡スチロールの容器に入つた豚汁を、大切そうに啜っていた。感動しているのか、涙を流している。

ペドフィリアの女は、よく目を凝らした。凝らすと同時に目を見開き、驚愕に口を開いた。

そう、ペドフィリアの女は、吸血鬼を知っていたのだ。

ブラッド「ツエペシユ」ヘンゼルーガ「グレテール」ドラキュラ
「太郎。」

熱帯魚の糞を想起させる長つたらしい名前。忘れるわけがない。女の初恋の男の子だった。

ペドフィリアの女は、ガムを噛むのがうまくなかった。それを心配した母親が塾に入れたのだが、そこにブラッド「ツエペシユ」ヘンゼルーガ「グレテール」ドラキュラ「太郎」がいたのだ。

彼が塾に入つたのは、トイレのマナーのせいだった。彼はどうしても汚物を便器の中に収めることができずに、壁に撒き散らしてしまふという悪癖があつたのだ。

ペドフィリアの女は二年ばかり塾に通うと、うまぐガムを噛めるようになったため、ブラッド「ツエペシユ」ヘンゼルーガ「グレテール」ドラキュラ「太郎」よりも早く退塾した。それなので、彼のトイレが上達したかどうかはわからなく、そのことが七十二年もの間、心のつかえになっていた。

そして更に女を驚愕させたのは、太郎の容姿である。変わっていないのだ。爪も伸びていないのではないだろうか。三歳児の姿のままだ。

何が起きたのだろうか。決まっている。ドラキュラの性質。不老とはいかずとも、極めて老けにくい。バイト先の女子高生は、サイヤ人の親戚であるから若い時間が長く、そのせいで三十四歳になっても女子高生でいるが、ドラキュラは違う。そう考えてみれば、太郎が塾にいたときは既に、十代だったということもあるし、三十路だったということもありえる。つまりその長い長い年月を、トイレマナーの習得に費やしているのだから、このドラキュラは集中力、根気……人間がおよそ人格者と呼ばれるに必要なものを全て有しているのかもしれないのだった。

そして女はペドフィリアだった。

「ツエペシュ」

女はいてもたってもいられなくなり、ドラキュラの名前を呼んでしまった。

最早ドラキュラとヴァンパイアの区別もついていない。じりじりと近寄り、甲冑を脱ぎ捨てていく。用意した鍋の蓋とひのきのぼうは、興奮のあまり地面に埋めてしまった。

銀色に塗ったBB弾を籠めたエアガンも、にんにくエキスをかけたハンカチも、箸で組んだ十字架も、女は空に埋めてしまった。

ドラキュラも女を思い出した様子だった。

「ツエペシュ。トイレはうまくできるようになった？」

「……まだだから、壁の無い所に住んでいるのです」

女は泣いて喜び、鼻を差し出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301w/>

バクの吐瀉物。

2011年8月29日00時14分発行